



TITLE:

# 基礎物理学研究所の歴史・補遺

AUTHOR(S):

長岡, 洋介

---

CITATION:

長岡, 洋介. 基礎物理学研究所の歴史・補遺. 物性研究 1997, 69(2): 242-245

ISSUE DATE:

1997-11-20

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/96173>

RIGHT:

## 基礎物理学研究所の歴史・補遺

関西大 工 長岡 洋介

(1997 年 5 月 21 日受理)

昨年「素粒子論研究」に載せた「基礎物理学研究所の歴史」(本号にも掲載)には何人かの方からご意見や誤の指摘をいただいた。このようにまとまった形で「歴史」が書かれてしまうと、そのうちにその記述がすべて間違いのない事実として受けとられてしまう恐れがある。そこで、記述の問題点、わかっている限りの誤の訂正等をここでまとめておきたい。かなり、筆者のいい訳も含まれている。

### 1. 研究所の歴史に何を書くか

もちろん、これが最大の問題点である。研究所の歴史なのだから、まず研究の歴史が書かれなければならないはずだ。しかし、それは不可能であった。これまで基研に在籍した所員の数に 100 人を越える。所員の研究に限ったとしても、それらの所員がどのような研究をしてきたかを書くことは、研究テーマの羅列であったとしても容易なことではない。さらに、共同利用研の歴史であるからには、共同利用の研究活動にも言及せねばならないだろう。しかも、しっかりした評価も含めて。それは戦後日本の理論物理学研究所の歴史を書くことを意味し、私たちの能力をはるかに越えるものであった。

研究の歴史を書くことはあきらめ、そのかわりにしたことは、長期にわたって継続した長期研究計画のテーマを拾うこと、15 周年、20 周年といった節目ごとに開かれたシンポジウムのプログラムを紹介することである。これはテーマの羅列にすぎないけれど、40 年余の基研の歴史の中での研究の推移を知る手がかりにはなると思う。

### 2. 所員の研究分野

いうまでもなく、研究は人がするもの。基研に所員として誰がいたか、は基研の歴史を知る上できわめて重要な情報である。表 4 の「元所員一覧」がそれであるが、表には所員を素粒子、原子核、物性・生物物理、宇宙の 4 分野に分けて記載した。基研からは定期的に出版している「要覧」では、元所員は着任順に並べてあって、研究分野は書いていない。しかし、それでは昔の所員についてどういう人だったかわからない、ということも生じてしまう。そこで、最低限の情報として 4 分野に分けたのである。だが、そうすると今度はどの分野にすべきか、判断の難しい人が出てくる。そこが基研のいい所なのだが、所員の中には基研在籍中に特定の分野にこだわらずに研究対象を広げていった人が少なくないのだ。

とくに分類が混乱しているのは「宇宙線」の研究者である。1950 年代の宇宙線研究は高エネルギー

素粒子反応の研究であり、その意味で上田顕氏は素粒子としたが、早川幸男、矢島信男氏は宇宙線 → 宇宙ということで宇宙の方に入っている。早川先生の基研における研究テーマは原子核反応、宇宙線であり、宇宙物理研究を始められたのは名大へ移られてからである。矢島氏は基研における宇宙線の研究から九大ではプラズマ物理の研究へと移っていかれた。

### 3. それはいつのことか

基研発足以後については「要覧」等の資料もそろっていて、記述にそう苦労はなかった。それ以前についても思い出話や座談会等があって、おおよその経過は明かである。しかし、「歴史」を書くとなれば、思い出話のように「それは\*年\*月の頃だったと思う」と書くわけにはいかない。それがいつであったかを限定する作業は必ずしも容易ではなかった。

もっとも困ったのは鳥養総長が記念事業を提案してから記念館完成に至るまでの時間的経過である。このあたりのことについて詳しいのは、そのとき中心的な役割を果たされた小林稔先生の書かれたものである。それは、1958年3月に基研から出た「基研案内」の中の「1. 基礎物理学研究所の沿革 — 湯川記念館設立の事情から基礎物理学研究所の発足まで」で、そこに述べられている記念館の建築工事が始まるまでの経過をまとめると、つぎのようになる。

- (1) 1950年11月      記念館建設準備委員会発足
- (2) 51年夏          建物の青写真できる
- (3) 51年秋          朝永・坂田・小林が鳥養総長に会い、記念館を全国の研究者の共同利用施設とすることを申し入れ、了解を得る。
- (4) 51年暮          入札、起工式

これによると、実際に工事が始まったのは52年に入ってからだろうから、52年7月末には開館式が行われているので、半年ほどで建物が出来上がったことになる。それほど大きくない建物ではあるが、当時としてそれが果して可能だったろうか。朝鮮戦争の影響で工事が遅れた、という証言もあるから、なおさらである。これが私の感じた疑問であった。

そうしていろいろ調べているうちに、坂本章之助氏の書いた小冊子「研究所を支えた人々」(昭和58年11月)が見つかり、その中に、工事入札が昭和25(1950)年12月に行われた、という記述を発見した。坂本氏は昭和58年当時の基研事務長で、基研事務室もしくは大学施設部に残っていた書類に基づいてこれを書いたのだと思う。そのことを裏づける書類がないものかと、私も基研事務室と施設部に調べてもらったのだが、見つからなかった。ただ、昭和26年2月の日付の工事関係の書類が見つかり、そのころには工事が始まっているらしいことは推察できた。小林先生の記述は1年あとにずれていた、ということになる。

どうして、このように日付にこだわるかといえ、工事入札が1950年か51年かによって、記念館設立に対する当時の文部省の対応がまったく違ったものに見えてくるからである。50年だとすれば、記念館建設の予算は昭和25年度についたことになり、1949年11月のノーベル賞、その後ただちに行われ

た京大からの記念館設立の要望、1950年1月の学術会議決議とおっていくと、文部省は今日の眼から見るときわめて異例な早さで要求に応えたことになるのだ。

小林先生の手書された経過の中で、(3)は記念館の性格を決めた、きわめて重要な出来事であった。これもまた1950年秋のことだったとすれば、京大と文部省の迅速な動きに対応して、研究者グループ（核研連）もまた半年余りの期間に集中的に議論をし、行動したことになる。私はこれがいつのことであつたかについて、小林先生の手書されたものを否定する根拠が見つからないまま、1951年のこととした。しかし、もしそうだとすると、建物の工事がかなり進んでからこうした申し入れがなされたことになるわけで、これはおかしい。小林先生は(1)～(4)の経過を1つの流れとして記憶しておられたと思う。(3)も含め全体が1年ずれていると考える方がよさそうである。

#### 4. 理論研創設のこと

理論研の歴史を調べていて、もっとも不思議に思ったことは、1944（昭和18）年という太平洋戦争のさ中に、理論研のように戦争目的とは無縁の研究所の設置がどうして可能だったのか、ということであつた。私は、理論研創設の頃のことをお聞きするため、富田憲二さんとともに、創設時の所員（併任）であつた竹野兵一郎、上野義夫両先生を広島におたずねした。そのとき両先生におききしてみると、当時から関係者はみな私と同じように理論研設置の実現を不思議なことと感じていたらしい。その後、上野先生から、こんなものが見つかった、として送っていただいたのが、372ページに一部を引用した「理論物理学研究所設置理由」の書類のコピーである。それは、なるほど当時としてはこれくらいのことは書いて、戦争への協力を謳わなければならなかったのだろうな — と思わせる内容だが、それで疑問が解けるわけではない。

昭和16年頃から敗戦まで、太平洋戦争のさ中に数多くの研究所が設置された。「歴史」の中にもそのいくつかを紹介したが、実際にできた研究所はこの程度のものではない。主題からはかなりはずれるが、興味深いから列挙しておく。

- 1941年 工学研究所（京大）、結核研究所（京大）、東洋文化研究所（東大）、低温科学研究所（北大）、選鉱製錬研究所（東北大）、抗酸菌病研究所（東北大）
- 1942年 東亜経済研究所（東京商大）、結核研究所（金沢医大）、液体工学研究所（九大）、東亜風土病研究所（長崎医大）
- 1943年 超短波研究所（北大）、触媒研究所（北大）、科学計測研究所（東北大）、高速力学研究所（東北大）、窯業研究所（東工大）、航空医学研究所（名大）、放射能泉研究所（岡山医大）、弾性工学研究所（九大）
- 1944年 非水溶液化学研究所（東北大）、燃料科学研究所（東工大）、理論物理学研究所（広島文理大）、木材研究所（京大）、電子工学研究所（東工大）、経営機械化研究所（神戸商大）、南方自然科学研究所（東大）、音響科学研究所（阪大）
- 1945年 硝子研究所（東北大）、輻射線研究所（東大）

一見してわかるように、理論研をほとんど唯一の例外として、他は工学系を中心とする軍事研究に直結しそうな研究所、もしくは「南方\*\*研究所」、「東亜\*\*研究所」といった「大東亜共栄圏」の占領地経営を目指した研究所ばかりである。政府が熱心にこうした研究所をつくった、というより、時勢に便乗して競って研究所の設立を要求した大学の姿が見えてくるようである。もちろん、研究所ができたといっても、建物ができるわけでも、多くの新しいポストがつくわけでもなくて、所員の多くは学部教授の併任で、若干の研究予算がつくだけという場合が多かったと思うのだが。

理論研はなぜできたか。結局、三村剛昂という人のもっていた文部省への影響力、だったのだろうか。

## 5. 合併問題をめぐって

今度の基研・理論研の合併に関しては、私自身そのさ中であって経験したから、よく知っているが、1957年にあったことについては、ほとんどはこの「歴史」を書いていて知ったことである。

じつは、このときの合併問題については、かなり詳細な記録が残っている。それは、当事者であった三村理論研所長が書き残されたものである。公開すべきものではないが、その存在だけはここに記しておきたい。

私自身が直接かかわったこととしては、研究棟新築問題があった。湯川記念館を建てるときも土地問題がたいへんだっただけだが、今回は農学部の土地と考えられていた場所に建ったのだから、そこに至るまでにはいろいろな経緯があったわけである。この「歴史」には書きえなかったが、基研の50周年記念にでも何か書く必要があろうかと思う。